

モーターファンオートスポーツ NO.19 毎月1回1日発行 昭和42年2月1日発行 第4巻第3号 昭和41年5月  
4日第3種郵便物認可 昭和41年3月1日国務省特例承認第2303号

# AUTO SPORT 1967 2

特報/世界選手権シリーズ第1戦 **南アフリカ・グランプリ**

2色読物 **レースとマシン・トラブル**

ニューマシン **ロータス・ヨーロッパ**



デイトナ24時間を待つフェラーリの新プロトタイプP-4

¥250

# 目で見る 世界一のスピード・ショップ地帯



〈写真上と右〉 有名な「ホットロッド・シティ」の看板と、ずらり並んだ各ショップ。このように、いろいろなスペシャル・ショップがいつしよになって「シティ」を形成している例がアメリカでは多い。

ロサンゼルスとその周辺はスピード・ショップの世界的な密集地帯だ。以下はカリフォルニア地方のレースにコンテッサで挑戦してきたロバート・ダンハム氏が写真とペンでつづるスピード・ショップ案内。——

写真と文 ロバート・ダンハム

## 油まみれの男たち

国内レースといわず国際レースといわず、アメリカのレーシング・エンジンのほとんどがカリフォルニア地方で組み立てられているとあっていいだろう。インディ・マシンの故郷もたいていロサンゼルス近辺だ。自動車の普及率もロス地方がいちばん高く、輸入される日本車の大きなマーケットにもなっている。スポーツカーの売れ行きはアメリカ一だし、ホット・ロッドの開発や設計がいちばん進んでいるのもロス地方だ。

レーシング部品のメーカーやディーラーたちはいうにおよばず特殊なレース・チューニングを行なうスピード・ショップの数も、まず世界一。それに、ひとつの州で4つのサーキット——リバーサイド、ウィロースプリングス、ラグナセカ、サンタバーバラ——を持っているのもカリフォルニア州くらいものだろう。トップ・ドライバーといわれる人たちの出身地も多くはこの西海岸に集中している。

このようにみえてくると、カリフォルニア——とくにロサンゼルスとその周辺が、アメリカ自動車レース工業の本拠地となって

ていることがおわかりだろう。

ロサンゼルス周辺のスピード・ショップはサンタモニカ、ロングビーチ、ガーデナ、カルバーシティ、バサデナ、イングルウッドといった町に散在しているが、旅行案内書などにはむろん紹介されていない。だから、たとえスピード・ショップの名前を知っていたとしても、それが何処にあって、だれがどんなことをしているか——かいても見当もつかない。

なかには、しょうしゃな新式のビルもある。が、たいていは一階建ての小さな建物で、壁もヒビ割れていたり看板のペンキも色あせていたりすることが多い。外から見ただけでは、とてもこの中で高度なレーシング・マシンの開発が行なわれているなんて想像もできないだろう。だが、このドアの内側で世界的に名の知れた技術者たちが腕をふるっているのだ。そこには、部厚いじゅうたんも敷かれてなければ、ニコリはほえみかけるキュートな女性もいない。いるのは油まみれの作業服を着たきたない顔の男たちだけだ。しかし、この男たちの頭脳と血と汗と涙によって今日のレーシング・マシンが作り出されていることを忘れてはならない。この男たちが仕立てるレ

〈写真右と下〉「ホットロッド・シティ」の中にあるドラッグ・マシン(ENGINE SPECIALIST)とオートバイ(10,000RPM)のチューンアップ・ショップ。

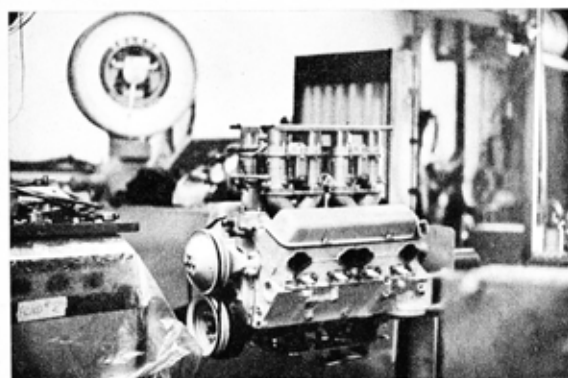
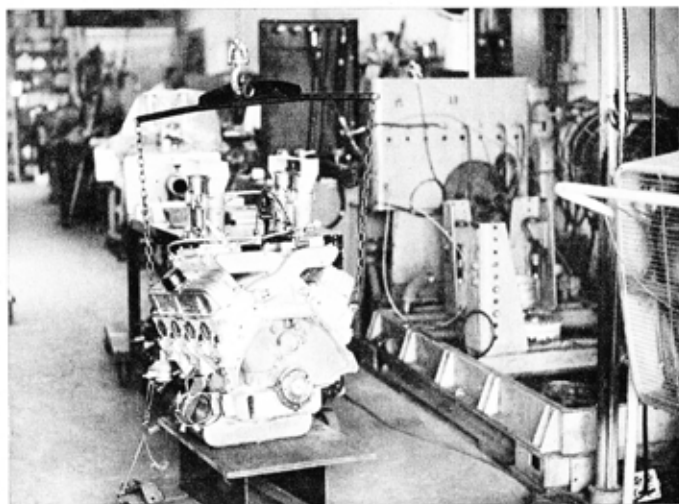


TRACOの名は、この会社を動かしているトレーバース(Travers)氏とクーン(Coon)氏からとったもの。シボレー、ビュイック、オールズモビルなど大容量エンジンのモディファイにかけては、すでに定評があり、現在のプロフェッショナルなレースに出場している車のほとんどが「トラコ」チューンのもものとみてさしつかえない。

「トラコ」チューンのシボレー・エンジンは1台で4500ドル(162万円)。年間の生産量は500台というから、売り上げ高は225万ドル(8億1千万円)に達する勘定だ。ふたりのエンジニアと8人のメカニックが

いるだけの会社としては、悪くない商売ではないか。スピード・ショップの広さも500平方メートルにすぎない。しかし、こうした商売も、ひとにぎりのエキスパートだけに許されたものにはちがいない。

「トラコ・エンジニアリング」の前にとめてあるのは、わたしのコンテッサで、そこに立っているのは秘書のカービー嬢。女性レーシング・ドライバーのひとりで、しばしば大の男を蹴散らしているので評判だが残念なことに彼女の住所も電話番号も秘密だという。



〈写真上と左2枚〉アメリカ西海岸のスピード・ショップとして、いちばん名高い「トラコ・エンジニアリング」の表看板と「トラコ」チューンのシボレー・エンジン。ショップ内部には、ごらんのようなテスト・マシンが整っている。

ーシングカーやエンジンがなければ、スター・ドライバーもチャンピオンも生まれてはこなかっただろう。

世間では「マシン6分に腕4分」などといわれているが、わたしにいわせると、レースに勝つ80%までの要素は、これらのエンジン・ビルダーやメカニックたちにおっていると思う。

チャバラルのジム・ホールみたいにドライバーであると同時にデザイナーでありカー・ビルダーであるばあいは、はなしは別だ。が、そうでない一般のレーシング・ドライバーのばあいは、ジャングルでライオン狩りをするはなしにもたとえられるだろう。

レーシング・サーキットは曲がりくねったジャングルだ。ライオン狩りがひじょうに危険なスポーツであることはいうまでもない。だから、まず最も性能のよいライフルと弾薬を選ぶ。次に優秀なガイドも必要だ。そうしたうえで、いちばん可能性のあるライオンの棲息地帯には入り込む。ライオンを追跡するには土着のガイドから助けを借りなければならない。これで初めてライオンに狙いをつけ、射ち殺すことができる。

「オレがライオンを殺したんだ」——ハンターはたいていこ

ういう。しかし、正確なガンと信頼のおける弾薬、それに優秀なガイドがなかったら、それは不可能だ。レーシングも、これと同じことがいえる。チャンピオン・ドライバーを送り出すためには、車とエンジンが決定的な要素となるのだ。

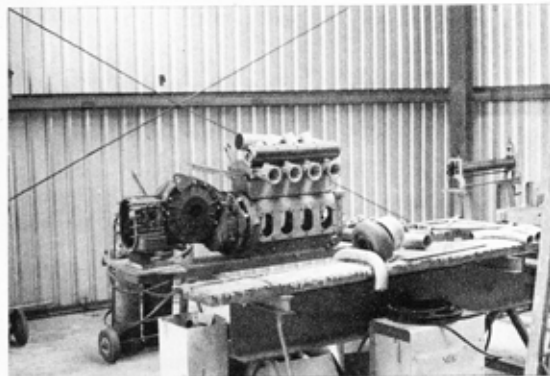
### スピード・ショップの秘密

このわたしが、コンテッサ1300クーペでビーター・ブロックとコンビを組み、カリフォルニア地方のレースに挑戦したことは読者のみなさんもすでにご存知だろう。わたしは、いろいろなサーキットで行なわれたレースに出場することによって、はかり知れないほどのレーシング・テクニックをまなびとることができたと思っている。が、それにもまして貴重だったのは、ロス地方のスピード・ショップで働くたくさんの優秀な技術者たちと直接あつて語ったり、いっしょに仕事をしたりすることができたという事実だ。これは、わたしにとって、すばらしい体験だった。

たとえば——われわれの車のフロントに積むオイル・クラウのインターク・スクープをたのんでおいた、ある有名なボディ



〈写真左と右〉 レース用のオイル・パンをつくっているショップの内部と、その店にあった67年インディをめぐす秘密のオフエンハウザー・エンジン。レース用のオイル・パンはただたんに大容量のものであるだけでなく、油圧低下の原因となるアワだちを防ぎ温度の急上昇をおさえるようなデザインでなければならない。われわれも、この店で新デザインの相談をしたが、店の名は秘密だ。67年用オフイー・エンジンはスーパーチャージャーを2個も取り付けるといふシロモノだった。



〈写真左と右〉 バランシング・ショップとして有名な“C & T オートモティブ”と“デイトロニック”。



〈写真左〉 タコメーター、アンメーター、油圧計、油温・水温計などのレーシング用計器類を売っている“スチュワート・ワナー”。アメリカではいちばん名の売れた店だ。



〈写真右〉 われわれのメカニックとオイル・ポンプやオイル・パンについて検討をかきねるM氏。かれの趣味はスチーム・エンジンで、蒸気タービンの優秀なプロトタイプ車や蒸気の船外機もつくっている。



〈写真左と右〉 グッドイヤーのレーシング・タイヤを売っている“キャロル・シェルビー・エンタープライズ”とピット・サービス用トレーラー。ここがロス地方の代理店となっており、われわれのコンテッサにもグッドイヤーを取り付けた。



ショップに立ち寄ったときのことだ。そのショップの片隅では数人の人たちがロケットふうの物体のまわりで一心不乱に働いていた。レーシング・ビジネスにとって秘密を守ることは何にもまして重要だ。その店の人も、むろん何もしゃべってはくれなかった。

それから2〜3カ月たって、わたしはウタ州のソールト・レークで行なわれたスピード記録の挑戦会を見に行った。わたしは自分の目を疑った。そこで、わたしが目にしたのは、あの小さなスピード・ショップで見たのと同じ“ロケット”だったからだ。その“ロケット”は二輪の世界スピード記録を破ったのである。

最高245.667mph(395.35km/h)。パワーはトライアンプの650ccエンジンを使用したものだった。

ここではロス地方にある有名、無名のスピード・ショップを紹介するのが目的だ。なかには有名なショップで、かんたんに取り引きができる所もあるが、大半は有能な個人によってささえられていて、レーシングの仲間うちではその名がとどろいていても、自分たちの名前が世間に広まるのを嫌がる風潮がつよいのだ。それは各メーカーや個人のオーナーの秘密に関与するところが大きいからかも知れない。

それなわけで、この写真ストーリーにも詳しい所在地を紹介できないのをお許しいただきたい。



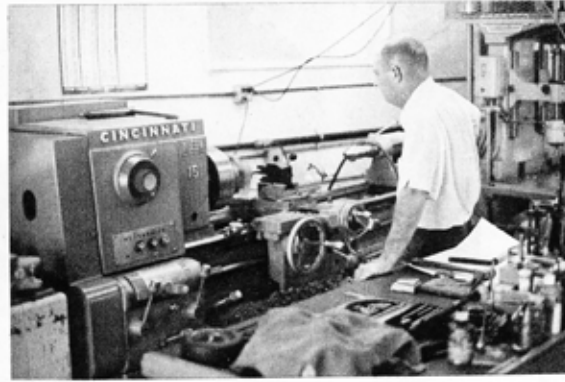
〈写真左と右〉 マグネシウム・ホイールやトランスミッションで世界的に有名なハリブランドのショップ兼倉庫と、同社がスポンサーになっているドラッグ・ボート。クライスラーやフォードやシボレーなどのパワー・ユニットを利用したこのドラッグ・ボートは水の上の0→400m加速で170mph(275km/h)にも達するという。



〈写真左と右〉 レーシング・ヘッドとバルブのスペシャル・ショップと、この分野での第一人者と目されているB氏。かれはいま特殊旋盤でバルブの軽量化をはかっているところだ。ヘッドでは燃焼室の機械加工や吸排気のポート研磨、バルブではバランスや軽量化やシートとのすり合わせなどが行なわれる。



〈写真左と右〉 レーシング・カムシャフトをつくっているショップのひとつ「イスクンデリアン」と、その内部。特殊旋盤で削っているところ。このほか有名なレーシング・カムのショップとしては「ムーン・エキップメント」、「エンゼル」、「C&T」などがある。



〈写真左〉 ヘッドの研磨やリポーリングにかけては一流の腕をふるうJ氏の小さなショップ。ごらんのようにショップそのものはとても貧弱だが、ここでは有名なレーシング・エンジンの多くを手がけている。



〈写真右と下2枚〉 バランシング・ショップ「E&T」とチーフ・エンジニアのマイク氏(中央)およびロッド・バランシングの機械。レース・チューンで回転部分の精密なバランシングが必要なことはいうまでもない。ここでは、クランク・シャフトやフライホイールをはじめブリーからクラッチ・プレートにいたるまで、あらゆる回転部分のバランスをとっている。

